

あの鐘の音を

あなたは聴いたことがありますか

割れた雲のすき問から

黄金の光とともに

あなたの上に降り注いでいる

あの鐘の音を

地球の声が、
きこえますか

ガイア

イルカ達も　山下も

梅千ち　山の音も

あの鐘を打つ者が誰なのか

もうとくに知っています

心で聴いてください

地球交響曲

地球交響曲

ガイアシンフォニー

第二番



監督：佐野洋一　脚本：ジョン・セイモア・ヨーロー（米国）　監修：ダニエル・クレイン　音楽：スザン・オベリー　原曲：Ari Marcia Song by Susan Oberley
音楽監修：木内義之　原木孝明　中村前野喜　友情出演：國木太郎　友情演出：鶴瓶和士　製作：佐野洋一　株式会社オーラス　監修：川上伸吾　監修：川上伸吾　企画・制作：佐野洋一　株式会社オーラス　監修：川上伸吾　企画・制作：佐野洋一　株式会社オーラス

月山ビジターセンター35周年記念事業(申し込み不要)

上映場所：月山ビジターセンター

上映日：11月19日(日)・12月23日(土)・24日(日)

上映時間：11月19日(日) ①10:00～ ②13:00～

12月23日(土)・24日(日) 13:00～

料金：大人500円/中学生まで無料

地球交響曲

ガイアシンフォニー 第二番

ホームページアドレス
<http://www.otrfilm.com>

もし、母なる星地球が本当に生きている一つの生命体である、とするなら、
我々人類は、その“心”、すなわち“想像力”を担っている存在なのかも知れません。

現代の地球の環境問題は、良い意味でも、悪い意味でも、人類の“想像力”的な産物だ、と言えるのです。
だとすれば、危機が呼ばれるこの地球の未来も又、人類の“想像力”すなわち“心”的在り方によって決まって来るのです。
この映画は、21世紀の到来を前に、地球の未来にとって、示唆にあふれたメッセージをもつ人々のオムニバス映画です。

登場人物はいずれも、現代の常識にとらわれず、素晴らしい未来を築きつつある人達です。

今生きている我々ひとりひとりが、“心”にどんな未来を描くかによって、現実の地球の未来が決まってくる…。

1992年に公開された「第一番」は、全国各地の観客自身による活発な自主上映活動に支えられ、94年末には、
全国400ヶ所25万人動員をはたしました。ひとりひとりの心のネットワークによって自然発生的に拡がっていったこの上映活動は、
この映画のテーマ「人の心は無限の可能性を秘めている」を現実に実証している姿だと思います。

このガイアネットワークの力によって「第二番」が完成しました。

映画「地球交響曲」が、全ての人々の“心”的ための元気薬になれば、と願っています。 龍村 仁



ジャック・マイヨール
(海洋冒險家)

1927年上海生まれ。10才の時、九州・唐津の海で、初めてイルカと出会う。30才の時、マイアミ水族館でメスのイルカ“クラウン”と運命的な出会いをする。そのクラウンから自然に、イルカのように、長時間の素潜りや水中遊泳をするやり方を学んだ。

1976年、素潜りで水深100mを越える記録をつくり、人間の生命力にかんする科学的常識を破る。ヨガ、禅など東洋の叡知を学び、人間は心の持ち方一つで常識をはるかに越えた能力を發揮しうることを身をもって示した。

映画「グランブルー」のモデルとなっている。

全生命の源である海との新たな出会いの中にこそ、人類の意識の覚醒と進化の鍵があるという。



14世ダライ・ラマ法王
(チベット仏教最高指導者)

ダライ・ラマはモンゴル語で「大海のような深い知恵を持つ聖人」という意味。觀音菩薩の化身としてこの世に遣わされたとい伝えられる。初代ダライ・ラマは15世紀に出現、代々転生を重ね、現法王は第14世。1935年7月6日チベット東北部の寒村タクシュに生まれ、2才の時13世の転生として正式に認められた。以後、チベット仏教最高指導者として厳しい修業を重ねた。1959年のインド亡命以来、数奇な運命を辿りながら、全人類の慈悲心の目覚め=意識進化を唱え続け、今、宗教、民族、国家の枠を超えて世界の人々の尊敬を集めている。1989年ノーベル平和賞受賞。東洋の叡知と西洋の叡知の調和の上に立った全人類の宇宙的覚醒を説く。



フランク・ドレイク
(天文学者)

1930年生まれ。カリフォルニア大サンタクルズ校天文系・宇宙物理学教授。SETI(地球外知的生命探査)研究所長。1960年、世界で初めてSETI計画(オズマ計画)を実施した。以来34年間、広大な宇宙でのET探しを続けている。

宇宙から降り注ぐ様々な電波の中から、人工的な電波信号を見つけて出す基本的な方法や、地球外文明の数をみつめる式となる「ドレイク方程式」の生みの親である。1974年には2万4千光年彼方のヘラクレス座M13に向かって、地球人類からのメッセージも発信した。

自分の生存中、あるいは人類の生存中には、決して答えが返って来ないかも知れない、はるか彼方の宇宙の見えない仲間に對して、問い合わせ続けるのは何故だろうか。



佐藤初女
(森のイスキア主宰)

佐藤さんは幼い頃、教会の鐘の音に惹かれ、何度も教会の前にたたずんだという。老人ホームを訪問したり、様々な生と死の出会いを重ねていくうち、「心だけは人々に与えることができる」と思ひ立った佐藤さんは自宅を開設、30年にわたり心を病んだ人々を受け入れてきた。やがて、佐藤さんは森の中に憩いの場、やすらぎの場をつくりたいと夢見るようになる。佐藤さんを母のように慕う人々によって、岩木山麓に「森のイスキア」が92年に完成した。そこにはまた、小さなエピソードが生まれた。アメリカの修道院から鐘が送られてきたのである。季節の移り変わりの中で、人の生と死に立ち会い、生きる喜びを分かち合っている佐藤初女さんを、弘前の四季とともに綴っていく。

ガイアシンフォニーと共に奏でる仲間たち

●人は思想を言葉で表現する。しかし、実は人は言葉だけでなく表情によっても思想を表現している。早い話が、いいことを言う人は顔もいいのだ。『ガイアシンフォニー2』に登場する四人の人たちの言葉は決して抽象的な固いものではなく、それぞれに人柄と融け合って、慈愛に満ちている。そして、それ以上のことを表情が語っている。その顔を見て、人間というのはなんとい顔をしているのかと考える。この映画を見るいちばんの楽しみはそこにあると思う。

池澤夏樹

●龍村仁さんの描く、私には想像も出来なかった世界にはじめは動搖し、しだいに深く魅せられてゆきました。あまりにも大きな自然、その「宇宙」の鼓動に聴き入り、リズムに乗って、静かに、強く生きる人びと。ここが温まり、視界が拓けてゆく素晴らしい作品群です。

岸 恵子

●私たちが毎日の生活で食べているもの、見るもの、聞くもの、全て母なる大地からのいただきもの。まるで、私たちが必要とするものを、どうぞ、持ってて、と言ってるみたい。朝日が昇る時には、笑顔になったり。夕陽が沈む時には、その美しさに見とれて、ため息がでたり。私たちのお母さんはさりげなく色々なことを与えてくれるのね。こんなに貴重な体験をさせてくれたお母さん、これからちゃんと親孝行したいな、と感じさせてくれたのがこの映画。

早見 優

●毎日、時間に追われ、いろんな人に会い、いろんな仕事をしていくうちに、いつのまにか、ゆとりを無くし、気がつけば自分自身さえ無くしている時があります。ゆっくりと人の話を聞き、ゆっくりとそれに答える。そうゆう基本的なやさしささえ無くしている時があります。この映画は不思議な映画です。知らぬまに心に付いてしまった垢を、まるで奇麗な水で洗い流すかのように、さっと落してくれる。「心を浄化してくれる」そんな映画だと思います。心が疲れたとき、僕はまたこの映画を見たくなるでしょう。

藤井フミヤ

GAIA(ガイア)とは、ギリシア神話に登場する地球の女神、“地母神”的ことです。